

アクティブシティフェロー育成プログラム 実施概要報告

【まとめ】

第1回 12/7(日)～12/9(火)

	時間	種別	科目等	担当
12/7(日) 1日目	14:00～	開校式	諸連絡等	事務局
	14:15～	課題抽出	ワークショップ①	横山
	16:00～	課題抽出	ワークショップ②-1	横山
12/8(月) 2日目	10:00～	課題抽出	ワークショップ②-2	横山
	13:30～	課題抽出	ワークショップ③-1	全講師
	15:15～	課題抽出	ワークショップ③-2	全講師
	17:00～	課題抽出	ワークショップ④ 発表	全講師
12/9(火) 3日目	9:30～	概論①	PPPまちづくり概論①	矢部
	11:10～	概論②	PPPまちづくり概論②	矢部
	13:30～	概論③	PPPまちづくり概論③	矢部

第2回 2/12(木)～2/13(金)

	時間	種別	科目等	担当
2/12(木) 1日目	14:15～	解決策①	地域分析①	井上
	15:55～	解決策②	地域分析②	井上
	17:35～	解決策③	地域分析③	井上
2/13(金) 2日目	9:30～	解決策④	EBPM①	熊谷
	11:10～	解決策⑤	EBPM②	熊谷
	13:30～	解決策⑥	EBPM③	熊谷

第3回 2/26(木)～2/27(金)

	時間	種別	科目等	担当
2/26(木) 1日目	14:00～	解決策⑦	合意形成①	矢部
	15:45～	まとめ	発表に向けた整理①	全講師
	17:30～	まとめ	発表に向けた整理②	全講師
2/27(金) 2日目	9:30～	まとめ	個人ワーク	全講師
	10:30～	発表・振り返り		全講師
	13:10～	修了式		全講師

【北海道名寄市】

- ①小田 美紗子:名寄市総合政策部スポーツ・合宿推進課 主査
- ②蓑島 智史:一般財団法人Nスポーツコミッションなよろ総務管理グループ

【長野県東御市】

- ③堤 裕美:東御市健康福祉部健康推進課 主任
(公益財団法人身体教育医学研究所 指導部長兼研究主任)
- ④上蘭 美千代:一般社団法人Sany TOMI 専務理事・クラブマネージャー

【静岡県磐田市】

- ⑤尾崎 翼:磐田市自治市民部スポーツのまち推進課スポーツ戦略グループ 主査
- ⑥高橋 亮祐:NPO法人スポーツコミュニティ磐田・ポーラスター 理事

【広島県北広島町】

- ⑦前迫 航平:北広島町まちづくり推進課スポーツ推進係 主任
- ⑧圓山 昌之介:一般財団法人どんぐり財団 事務局次長

【香川県丸亀市】

- ⑨小磯 幹太:丸亀市協働推進部スポーツ推進課 副主任
- ⑩山中 達也:公益財団法人丸亀市スポーツ協会



<開校式>

- 渡邊一利理事長による歓迎のあいさつに始まり、アクティブシティ事業の概要、講師・スタッフの紹介を行った。

<ワークショップ①:横山講師>

- 事前に受講生が提出した自己紹介シートを活用しつつ、参加者による1分間自己紹介。
- アイスブレイクとして、「地域の社会課題を解決していく組織の名前」をテーマにグループ名を考えるワークを実施。地域の社会課題をリストアップ(ブレインライティング)、グループ分け(グルーピング)、優先順位をつけてグループ内での合意形成をはかるトレーニングを目的。

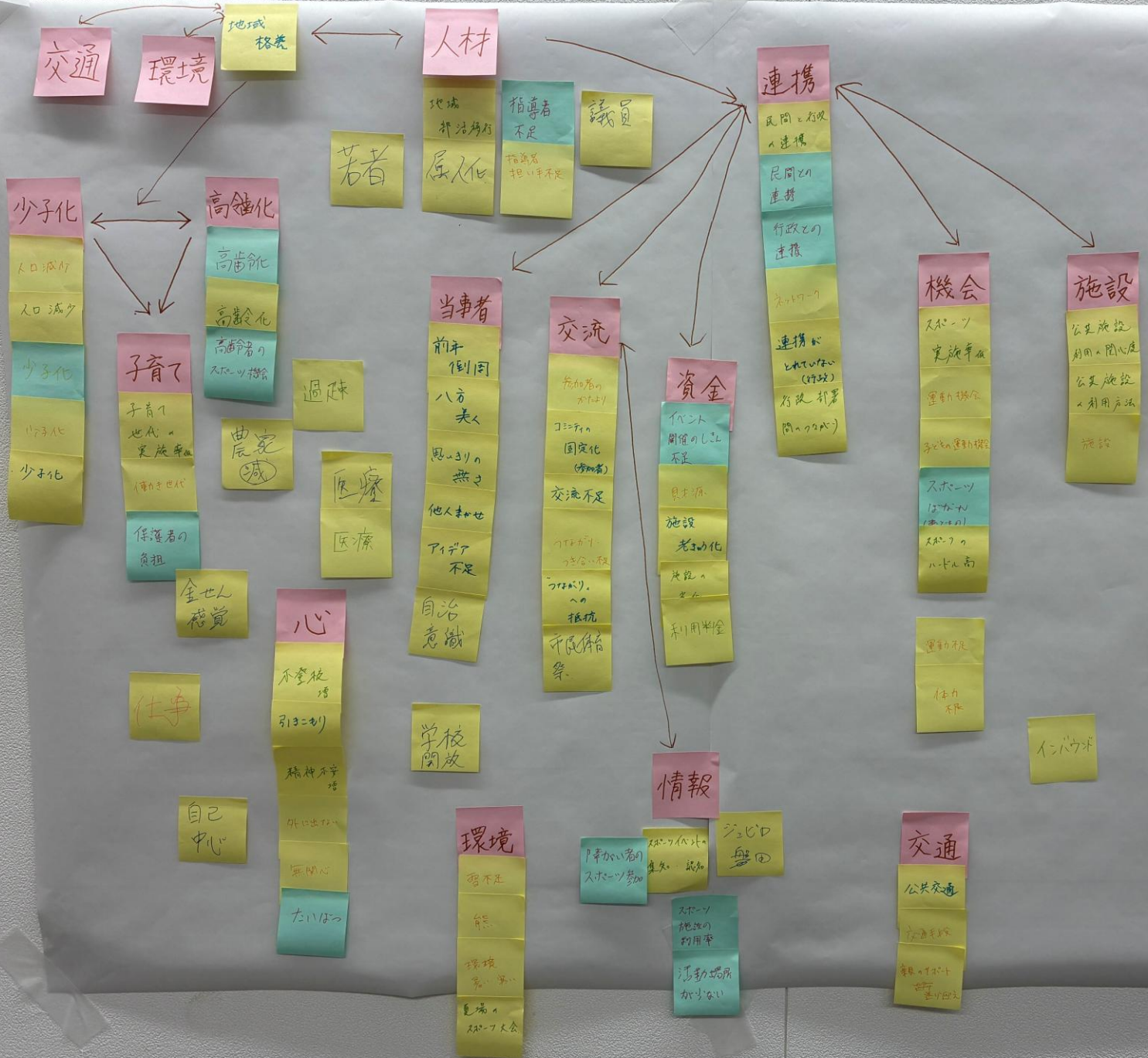
グループ名:

い) 笑顔で動く情熱スポーツ大陸

ろ) 笑(ニコ)

は) First Wellness

- アイスブレイクとして体験した合意形成フローをもとに各地域の課題に焦点を当てワークを実施。
 - ✓ 各地域にある課題(30個)リストアップ
 - ✓ 課題のグルーピング
 - ✓ Microsoft Lenzの使い方の紹介





<ワークショップ②:横山講師>

- グループ化した課題同士の関連性をグループ内で議論し、模造紙上に矢印で課題を結び可視化。
- 各グループの代表者による議論内容の共有するプレゼンテーションと質疑応答を実施。

<ワークショップ③:横山講師>

- 「問題点:事実(基準と現状とのギャップ)」と「課題:解決すべき状態」を定義。これまでの議論で出てきた問題点(例:スポーツ環境、高齢者、子育て、コミュニティ)の中から、課題に書き換え、昇華させるワークを実施。作成した課題のうち、類似する課題を集約。
- 優先度をつける手法として、グループ内で集約した課題の重要度と実現可能性の2つの視点から5段階で評価。



<ワークショップまとめ:全講師>

- グループで課題を提示する三段論法のプレゼンテーションを作成し、発表。講師による評価、コメント。
 - ① 現状:事実・データをベースに現状説明
 - ② 問題点:誰にとってあるべき姿とギャップを明示
 - ③ 課題:「あるべき未来」 向かうべき方向性を示す

ことものスポーツ機会を増やす

2017年 35分 → 2023年 28.3分

1986年 86.3% → 2021年 76.8%

いつでもどこでもスポーツができる

部活動の地域展開による生徒の繋がりが薄くなる

① 事実

アンケート結果

<立場別回答>

保護者	楽しく安全な活動
教員	労働時間の軽減
生徒	友達と楽しく

②

あふみ

納得のいく平均点

③

First Wellness

VS

友達と楽しく活動している場所

現状

アンケート結果と不一致

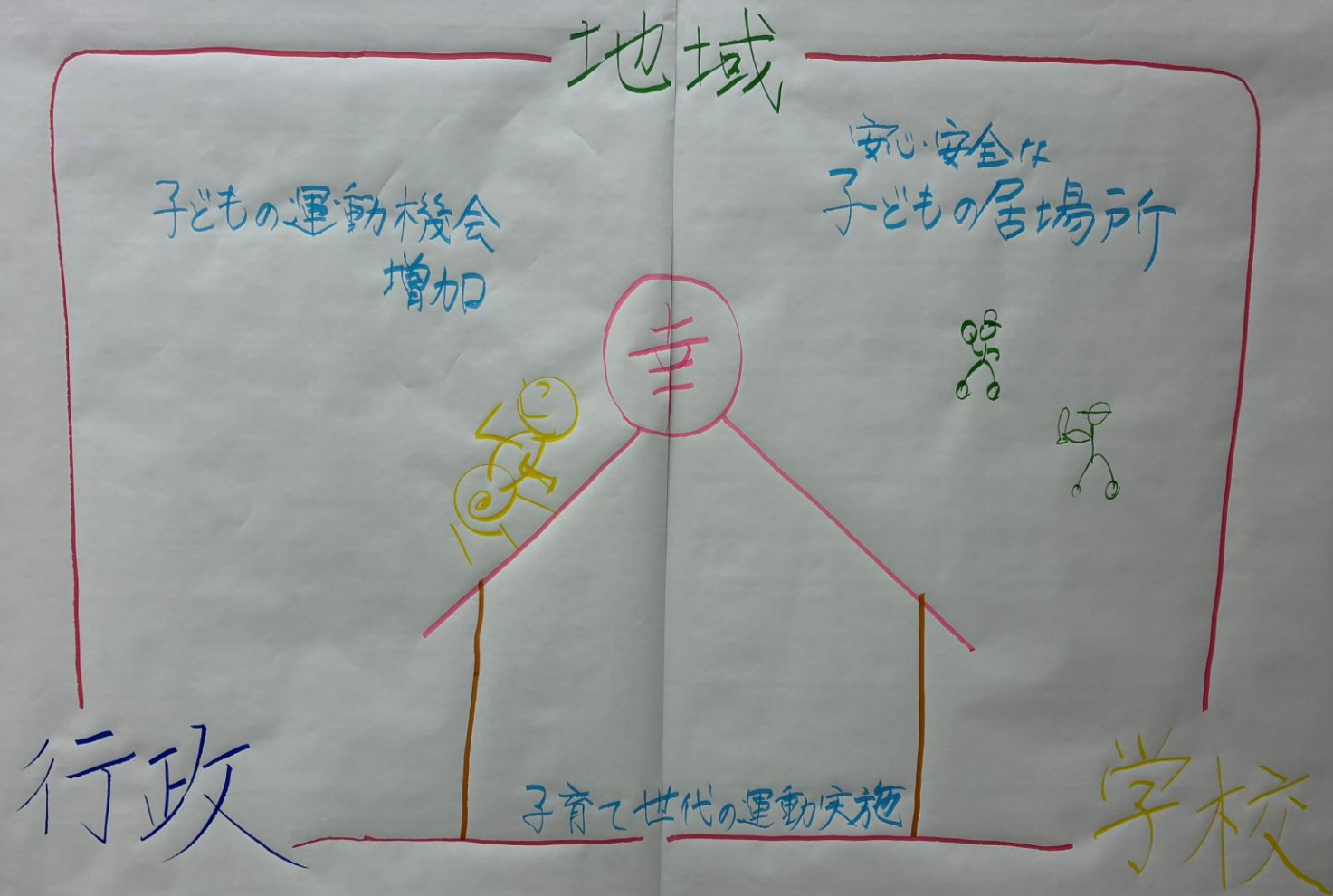
子育て世代が気軽に集える機会場の不足が保護者同士のつながりを弱くしている

子育て世代の相談する人が2割増
「女性」5年増
8%増

安全な環境を整える
1.6万見守り
70.2%
「子どもが安心して活動できる環境を整える」
5年増
4%増
出玉見数 5年間で17%減

出玉見数 5年間で17%減

追加のメモや貼紙

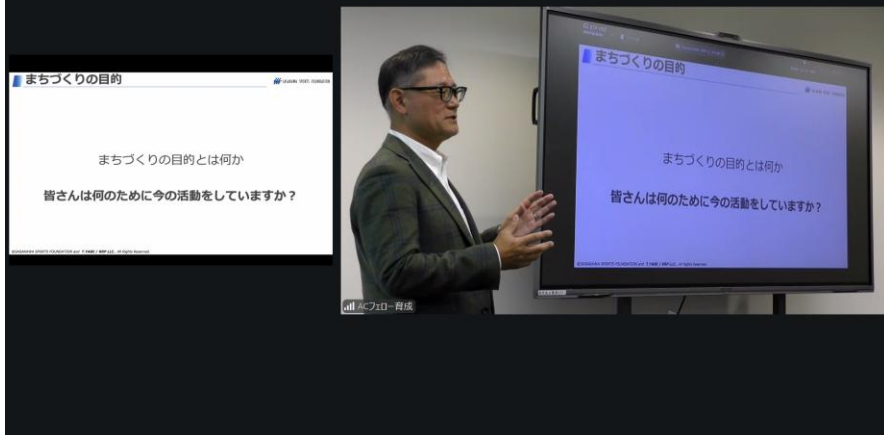




<PPPまちづくり概要①②③:矢部講師>

Public Private Partnership (PPP)の概念とまちづくりの観点での連携のポイントについて講義を行った。

1. ハード整備から「価値の循環」へ。単に物・建物を作るのではなく、場所の価値を創造(Creation)し、それを収益としての果実を取得(Capture)する仕組みの構築が不可欠。図書館等の公共施設を広告や集客装置と捉え、テナント料で維持費を賄うような、経済合理性と公共性を両立させる視点が求められる。
2. 終わりのない営みとブランド構築の重要性。まちは「ゴーイングコンサーン(継続性)」が前提。独自性・一貫性・認知を軸に地域ブランドを築き、関係者の共感を得るプロセスが必要。未来から逆算するバックキャストを用い、RESAS等のデータでビジョンの解像度を高めることができる。
3. プロセスデザインと行政のマインド刷新:行政は単なる発注者ではなく、PPPエージェント(民間パートナー)を目利きし、リスクとリターンを設計する役割を担えるようになる必要がある。現状のインプット・アウトプットで満足せず、成果(アウトカム)に繋げるためのプロセスデザインが事業成功の鍵となる。





<地域分析①②③:井上講師>

地域分析の目的と地域経済分析システム「RESAS」を具体的な使い方・活用方法について講義を行った。

1. 単に数字を確認するだけでなく、地域分析の目的は地域の課題解決や新しい発見を得ることにある。客観的なデータを重層的に組み合わせ、背景にある構造を読み解く重要性を強調。事前に立てた自身の仮設と異なる結果が出る場合も多くあり、「新しい発見」として前向きに捉える姿勢が重要。
2. 地域経済分析システム「RESAS」を用いた具体的なデータ収集と分析手法を紹介。RESASは、データの収集やグラフ作成の手間を省き、効率的に地域の実態を把握できるツール。人口推移や将来推計、産業構造などの基本データに加え、位置情報や地域の幸福度を測る「ウェルビーイング指標」など、多角的な分析メニューが実装されている。実際にアクセスして、受講生の自治体の情報について分析作業を行った。
3. 定住人口に加えて、通勤通学、進学・就職に伴う人口移動、観光客の動向など短期的・長期的にも「動く人口」に焦点あてる分析について説明を行った。人々の行動範囲に着目して、地域経済への影響を考える重要性を見出し、RESASではカバーできない観光データ等は自治体独自の調査で補完する必要があるとし、客観的な数値と市民の主観的な幸福感(ウェルビーイング)の両面から地域を捉えることの重要性を説明。ワークとして、各自治体の分析結果を基に、受講生自身の自治体の現状を把握した。

講義「地域分析」の前提と目的

前提: 「解決したい」と思える地域の課題を「ある程度」認識していること
→分析によって、「**新たな課題**」や「**真の課題**」が見えてくる

※目的がないまま地域分析をしても、あまり意味がない

目的①地域の課題を**数値で把握**し、より明確にできること

目的②地域の課題について、**構造や背景**を把握できること

目的③地域の課題について、**新たな知見**を得られること

※地域分析は「楽しい」



<EBPM①②③:熊谷講師>

EBPM(証拠に基づく政策立案:Evidence-Based Policy Making)の概念と実装に向けたワークを行った。

1. EBPMの概念と重要性を概説。行政事業レビューや規制改革の具体例を紹介し、政策におけるロジックモデルの基本となる「インパクト」「アウトカム」「アウトプット」「アクティビティ」「インプット」の連続する要素を示し、単なる事業の継続ではなく、客観的な根拠に基づき改善を図るプロセスの重要性について説明。
2. スポーツ庁の事業を対象にした行政事業レビューシートを題材に、事業の目的や成果を可視化する手法を解説。シート内にある効果発現経路の重要性やアクティビティから短期・中期・長期アウトカムへと至る論理構造(ロジックモデル)の読み解き方を説明。自己評価や外部有識者による点検のプロセスを通じ、形骸化しがちな政策目的をいかに明確にし、改善につなげることでより効果のある政策・事業を行うことが可能になる。
3. ロジックモデルの作成を実務レベルに落とし込むため、組織・チーム・個人の各レベルでの「ミッション(使命)」「ビジョン(目標)」「バリュー(価値観)」を整理するワークを実施。また、データの相関関係と因果関係を混同せず、客観的なデータに基づき、地域の特性を考慮した多角的なアプローチで課題解決に取り組む姿勢の重要性を改めて強調した。

MVVワークシート

2025 SSFフェロー育成第2回 2026.2.13

	ミッション	ビジョン		バリュー	
組織	組織としての使命は	いつまでに、何を実現するのか		組織が重んじる価値観や規律、合言葉は	
チーム	チームとしてのミッションは	いつまでに、どんな成果を	成果を表す指標・目標は	顧客は誰か	顧客にとっての価値は
				活動対象としての顧客は	
				パートナーとしての顧客は	
私個人	職員としてのミッションは	職員としての当面のGOALは		職員として大切にしていることや私の武器は	
	一個人として、私の生きる意味は	人生の目標は		信条・座右の銘や特技は	

ロジックモデルワークシート

2025 SSFフェロー育成第2回 2026.2.13

定性的

定量的

めざす社会の姿や価値は

めざす社会の姿や価値は、何を指標として、どのような数量となるか



めざす社会の姿や価値を実現するために、どこに、どのような行動変容が必要か

必要な行動変容は、何を指標として、どのような数量となるか



必要な行動変容をもたらすために、どのような取り組み結果が求められるか

取り組み結果として求められる量的な水準は



必要な行動変容をもたらすために、どのような取り組みが求められるか

取り組みの量的(実行数)な規模感



投入すべきリソース(資源)はどのようなものがあるか

投入すべきリソース(資源)の量は



KPIワークシート

2025 SSFフェロー育成第2回 2026.2.13

めざすゴール:KGI	成功の鍵:KSF	出来を測る:KPI
<div style="border: 1px solid black; height: 150px; width: 100%;"></div>	<div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 100%;"></div>	<div style="border: 1px solid black; height: 30px; width: 100%;"></div>
	<div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 100%;"></div>	<div style="border: 1px solid black; height: 30px; width: 100%;"></div>
	<div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 100%;"></div>	<div style="border: 1px solid black; height: 30px; width: 100%;"></div>
	<div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 100%;"></div>	<div style="border: 1px solid black; height: 30px; width: 100%;"></div>
	<div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 100%;"></div>	<div style="border: 1px solid black; height: 30px; width: 100%;"></div>
	<div style="border: 1px solid black; height: 40px; width: 100%;"></div>	<div style="border: 1px solid black; height: 30px; width: 100%;"></div>

↑ 直接的に関わるもの
↓ 間接的に関わるもの



<合意形成:矢部講師>

まちづくりにおける「合意形成」の本質と、相手を動かすためのプロセスデザインについて講義を行った。合意形成は、単なる説明や説得ではなく、アリストテレスの弁論術(エートス・パトス・ロゴス)に基づき、論理、共感、そして信頼を積み上げるプロセスであることが説明された。

なにに基づき・どのような場面で合意を形成するかに着目し、ステークホルダーの主張を少しずつ譲り合う「妥協」を前向きに捉えること、ある意見に対して疑問を持ち・疑うことで、より深い議論を生み出すことができると強調された。

<発表に向けた整理>

事前課題として、フェロー育成プログラムでの学びを活かし、受講生が新たに取組みたいスポーツを活用した事業について6W3H1G*の視点でワークシートを作成した。

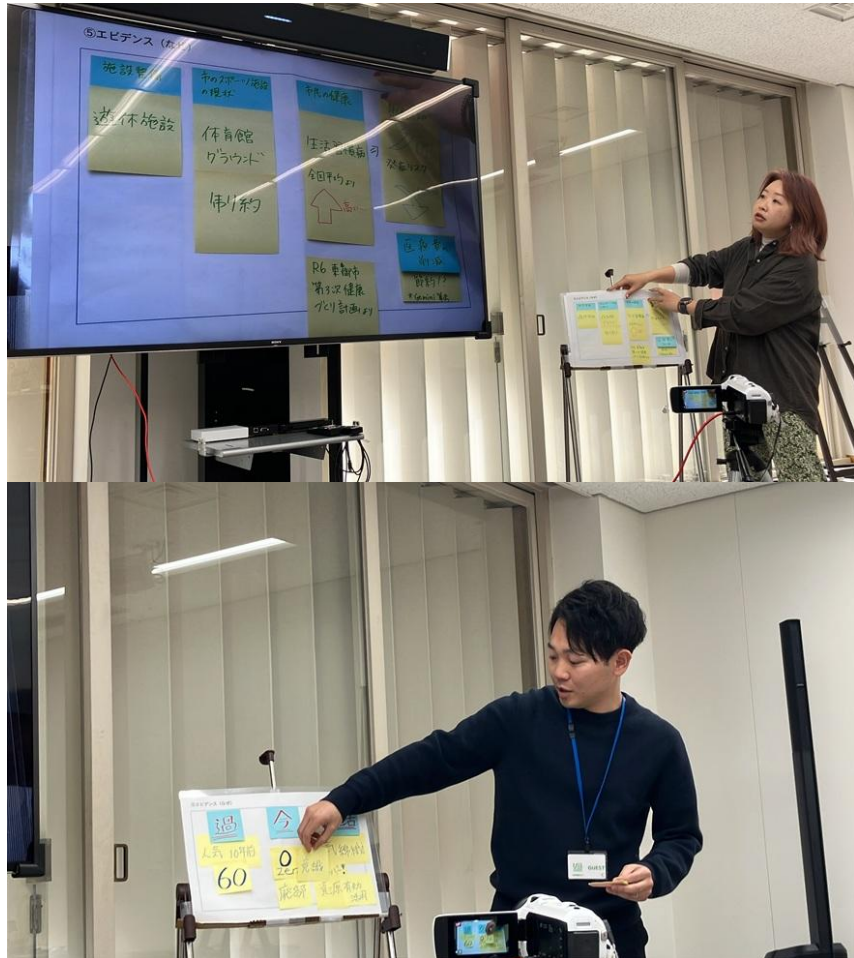
その内容を基に、自身の地域社会課題を絞りこみ、プレゼンテーション用に4点(Goal、What、To Whom、Why)の精度を上げるため、個人・グループでのワークを実施した。



ワークシート

地域社会課題()	
① 提供するサービス (何を) (ポストイット貼付エリア)	② 目的 (誰のため) (ポストイット貼付エリア)
③ アウトプット/アウトカム (何のため) (ポストイット貼付エリア)	④ エビデンス (なぜ) (ポストイット貼付エリア)

*6W3H1G:What(何を)、Who(誰が)、When(いつ)、Where(どこで)、How(どうやって)、Why(なぜ)、To whom(誰に対して)、How much(いくらで)、How long(どの期間で)、Goal(どんな地域・世界を作りたいのか)



<発表>

受講生が7分間で「新たに取組みたいスポーツを活用した事業」についてプレゼンテーションを行った。プレゼンテーション後の質疑応答を行う代わりに、よかった点・改善点をそれぞれ受講生がポストイットに記載した。

<主な発表内容>

①名寄市(小田)

冬季の運動習慣化に向け、スポーツ施設等を巡るスタンプラリーを提案。マップ等で情報提供を行い、冬(雪、寒さ)への抵抗感を減らし運動を促す。

②磐田市(尾崎)

30代女性を対象に、地域資源を活かした「スポーツらしくない」気軽なウォーキングを提案。企業と連携し、楽しみながら習慣化を促す。

③東御市(堤)

東御市の未就学児親子へ里山での外遊びを提案。健診や出張イベントで周知し、遊び場不足や地域交流の希薄化解消と参加者増を図る。

④北広島町(圓山)

北広島町民500名超を対象に、多世代交流型の運動会を提案。酒類や歌合戦も取り入れ、練習成果の披露を通じ地域活性化を図る。

⑤丸亀市(山中)

市民体育祭を、縁日等の遊び要素を加えた「市民運動会」へ刷新。子育て世代の参加障壁を下げ、地域交流と競技人口の拡大を図る。

<講師からの講評内容①>

1. 単発イベントから習慣化への仕組みづくり

イベントを開催して「楽しかった」で終わらせるのではなく、それをきっかけにコミュニティや家庭内で自発的な行動に結びつける仕組みが必要である。イベントが参加者の日常の行動をどのように後押しできるかという視点が、習慣化(実施率向上)の鍵となる。

2. 「目的・目標・エビデンス」の型とロジックの強化

「何のために(目的)」「いつまでに(目標)」「なぜやるのか(エビデンス)」の3要素をセットで捉える「型」が重要である。特に、特定のターゲット層を動かすことが全体の計画や統計指標にどう影響を与えるかといった、論理的な整合性が求められる。

3. スポーツの概念の再定義と拡張

スポーツを「専用のウェアや靴で行う本格的なもの」と限定せず、駅まで歩くことや家の中での活動、あるいはチェスのような頭の運動まで含めて広く捉えるべきである。既存の固定観念を外すことで、提案の幅が広がる。

4. 潜在的ニーズ(インサイト)へのアプローチ

「時間がない」「場所がない」といったアンケート上の表層的な理由を鵜呑みにせず、人間の本能や「楽しそう」という動機、あるいは「やらなければ健康を害する」といった価値・危機感に訴えるインサイト(本音)を突くことが、行動変容には不可欠である。

<講師からの講評内容②>

5. 独創性と波及効果(マルチベネフィット)の意識
現実的な提案に留まらず、時には既存の枠を超えた斬新なアイデアを取り入れることで、変化を生み出す必要がある。また、ひとつの施策がコミュニティの再構築や他産業への経済効果など、複数のプラスの効果を生み出すよう意図的に設計することが望ましい。
6. 情熱の維持とネットワークの活用
自身の「好き」や「やりたい」という情熱(パッション)こそが、周囲や行政を動かす原動力となる。研修で得た全国の仲間との繋がりを大切にし、学んだ内容を地域に持ち帰って具体的に一步を踏み出すことが、フェローとしての真のスタートである。

